学べる道具 VOL.53

岡崎むかし館

暖簾（のれん）

岡崎むかし館蔵

語源としては「ノンレン」と読み、転じて「ノウレン」から「ノレン」になったとされ、冬の寒さを防ぐために用いた簾（すだれ）と一緒にかける垂（た）れ幕を意味します。中世の絵巻物に暖簾（のれん）をかかげた町屋（まちや）が描かれ、古くから用いられていたことがわかります。江戸時代になって、商品名や屋号（やごう）など染抜（そめぬ）くようになり商家では店の象徴として発達します。江戸時代末以降には、居酒屋（いざかや）などで縄（なわ）暖簾（一本の横竹に幾筋（いくすじ）もの藁（わら）縄を垂らしたもの）を入口にかけたことから、後に「なわのれん」は飯屋（めしや）・居酒屋の代名詞になります。

昭和の頃には、一般家庭でも間仕切（まじき）りや目かくしに暖簾を用いることが流行しました。主に台所(キッチン)への出入口に、丈（たけ）の短い半暖簾や、木玉をいくつも糸に通して吊（つ）り下げた玉暖簾が下げられていました。現在の家ではリビングダイニングキッチン（居間（いま）・食堂・キッチンを仕切らない間取り：LDK）などオープンな間取りが好まれ、暖簾も以前ほど使用されなくなりました。それにあわせ、各地の土産物屋（みやげものや）の定番（ていばん）商品であった名所（めいしょ）や方言（ほうげん）などが記された半暖簾もすっかり見かけなくなりました。しかし、店では軒先（のきさき）など通りに面して暖簾をかかげ、日除（ひよ）けや看板（かんばん）として現在も多く活躍しています。

＜参考文献＞　『魅せる方言』井上史雄ほか、三省堂、2013 年
『日本民具辞典』日本民具学会、ぎょうせい、1997 年　　『新語源辞典』山口佳紀、講談社、2008 年